だれもあそんでくれなくなった

ひるやすみ。おとこの子は　みんな、うんどうじょうで　あそんでいます。
でも、ひろしさんは、一人だけ　としょしつで　本を　よんでいます。
せんせいが、
「みんなと　あそばないの。」
と　ききました。
たくろうさんも「いっしょに　あそぼう」と　こえを　かけました。
ひろしさんは、
「本が　よみたいから。」
といいました。
ある日、ひろしさんは、さくぶんを　かきました。

ぼくは、本が　すき。けど、いえだけで　よんでいた。けど、あそびあいてがいないから、としょしつで　本を　よむように　なりました。それからも、ずっと　本を　よんでいます。

つぎの日、みんなで　はなしあいを　しました。
たくろうさんが、
「ひろしさんは、としょしつの　本を　だいたい　よんだよね。ぜんぶ　よんだら、どうするん。もう　いくとこが　なくなるやん。だから、ひろしさんも　いっしょに　あそぼう。」

ひろしさんが　もういちど　さくぶんを　かきました。

ときたま　さそってくれるので、あそんでいました。けど、いじめられるときも　あります。だから、いまは　ともだちと　あそぼうと　いっても　あそべなくて　つまらない。だれも　あそんでくれなくなった。
ぼくは　もう、ひとりで　あそんでいるだけじゃなく、みんなと　いっしょに　あそぼうとおもう。

だれもあそんでくれなくなった（小学校低学年向け）

A　教材設定の意図

子どもたちは、遊びを通して仲間づくりをし、お互いを大切にする行動や考えを身につけていくことが多い。反面、仲間はずれなどの差別や「いじめ」につながるような行動も、遊びのなかで一番よく現れる。

こういった学級に見られる問題を解決していくためには、仲間はずれにされている子の気持ちを、「自分は誰からも見捨てられている。仕方がない。」とあきらめているところから、「少なくとも先生や何人かの友だちは、分かってくれている。」という思いに変えていかなければならない。その際、仲間はずれにされている子に、自分の本当の気持ちを素直にみんなに伝えさせることが大切なポイントになる。

本教材は、自分の学級に仲間はずれの問題がないか考えさせようとするものである。

教材のなかでしっかり考えさせておきたいのは、ひろしさんが最後に、「みんなと　いっしょに　あそぼう。」と書いてきたことについてである。それには、たくろうさんの発言が重要な意味を持っていることにぜひ注目させたい。なぜ、たくろうさんの発言によって、ひろしさんが書く気になったのか。それはだれも　あそんでくれなくなったひろしさんの「つらさ」を、たくろうさんだけは分かってくれていると、ひろしさんが感じたからであろう。

この点をていねいに確認することが、学級のみんなとの関係を改善するきっかけとなるだろう。そうしたなかから、仲間はずれにされている子自身も、自らの置かれている状況を変えていこうとする方向へと好転させたい。

B　教材の解説

本教材は、ある小学校の学級での話をもとにしている。

まとまりのある学級に見えても、仲間はずれのような差別は度々起こる。この学級も例外ではなく、幾度も学級内の分裂や差別の現実があきらかになってきた。その度に、子どもたちのなかの問題を掘り起こし、学級の課題を明確にして、集団としての取り組みを積み重ねて来た。

当時のひろしさんは、昼休みになると、教室の男子のほとんどが運動場に出て遊んでいる中で一人、図書室で本を読んでいた。帰宅後も、自宅にいることがほとんどであった。

そうしたひろしさんに、担任が「みんなと遊ばないの？」と尋ねると、ひろしさんは「本が読みたい。」と言う。学級の仲間が時々ひろしさんを遊びに誘っている場面を見ていたこともあって、担任は、「本人がみんなと一緒に遊びたくないのなら、それはそれでいいのかもしれない。」と思った。それで、友だちと遊ぶことの少ないひろしさんのことが気になりながらも、ひろしさんの言葉の上辺の部分をそのまま鵜呑みにしていた。

担任は、人権週間のときに、映画「エレファントマン」を教材に、ジョン・メトリックが背負わされてきた人生と自分の人生を重ね合わせて、それまでに自分がしてきたこと、されてきたことを、一人ひとりの子に振り返らせる授業をした。それまでの自分を深く見つめ直してもらうことと併せて、「あの子はあんな子や」というレッテルを貼られた見方をされたまま学校生活を過ごしている子が、その思いを語ってくれれば、という願いがあったからだ。

その時、学級の子どもたちなかで、ジョンが聖書を愛読していた事実に目を向けたのは、ひろしさんだけだった。寂しさゆえに本とつながるという部分で、ジョンに深く共感しているひろしさんの姿から、ひろしさんの教室のなかで置かれてきた「さみしさ」や「つらさ」が担任にもはっきり伝わってきたのである。ひろしさん自身も、「図書室に行くようになったのは、まわりの友だちが遊びの輪の中に入れてくれなくなったからだ」と、初めて自分の思いを綴ってきたのである。

それでも、担任がひろしさんの思いをみんなに返して、話し合いを進めていったときには、ひろしさんは「今のままでいい。」と言い張った。それは、それほどまで自分を頑なにさせるほど、ひろしさんは「つらい」思いをしてきたということであり、担任や教室の子どもたちに対する突きつけでもあった。

このひろしさんの突きつけに、たくろうさんは「ひろしさんは、としょしつの　本を　だいたい　よんだね。ぜんぶ　よんだら、どうするん。もう　いくとこ　なくなるやん。だから、ひろしさんも　いっしょにあそぼう。」という言葉で応えてくれたのである。ひろしさんはそんなたくろうさんがいてくれる教室だからこそ、安心して心を開き、「みんなと　いっしょにあそぼう」と書いてきたのである。

C　指導上の留意点

自分の学級のなかのひろしさんは誰かが、はっきりとみんなに分かることもあるだろう。しかし、そのようなときも、学級の問題にいきなり結びつけるより、この教材のなかの世界でまず問題を整理する必要がある。

また、一人で過ごしていることや、一人で本を読んでいることと自体が問題なのではなく、また外でみんなと遊ぶことが良いのだといっているのでもない。その子がどんな気持ちでそうした行動をとっているのか、まず教師がきちんと知ることが大切である。

D　参考資料

・一九九一年度人権週間の取り組み報告
　中田　省己（美川町立湊小学校・・・当時）

・挿し絵　川畠　敏憲（辰口町立中央小学校）

E

授業の展開例

教師の基本発問・助言	児童の活動・指導の要領
1　導入 ①みなさんは仲よく遊んでいますか。	①軽く学級の様子を出させるが、ここでは問題を浮上させるに留める。
2　展開 ②プリントを読みましょう。 ③ひろしさんはどんな子でしょう。	③「一人だけ　としょしつで　本を　よんでいます。」という事実に照らし合わせて発表させる。
④先生はなぜ、ひろしさんに「みんなと遊ばないの。」と、聞いたのでしょう。	④先生は、一人でいるひろしさんのことを気にかけていることに気づかせる。
⑤ひろしさんはなぜ、「としょしつで　本を　よむように」なったのでしょう。	⑤本当はみんなといっしょに遊びたいという、ひろしさんの気持ちを理解させる。
⑥ひろしさんが、「みんなと　いっしょに　あそぼう」と書こうと思ったのは、どうしてでしょう。	⑥「だれも　あそんでくれなくなった」ひろしさんの「つまらなさ」を、たくろうさんが理解していたことを知って、ひろしさんが書こうと思ったことを押さえる。 たくろうさんの発言をきいたときの、ひろしさんの気持ちを考えさせる。
3　まとめ ⑦この学級にも、同じようなことはありませんか。	⑦学級の問題を作文に書かせ、話し合わせる。作文の仲に仲間はずれにされている子の訴えがあれば。大切にしたい。